

第2回尾道市立小・中学校の在り方検討委員会 議事録

- 1 日 時 令和7年10月9日（木） 19:00～20:50
- 2 場 所 委員尾道市役所 2階 多目的スペース1、2
- 3 出席委員 藤井委員（委員長）、林原委員、灰谷委員、工藤委員、本村委員
竹田委員、緒方委員、加納委員、杉原昌宏委員、藤原委員、松葉委員
杉原禎也委員、土井委員、本安委員（副委員長）、畦知委員、中山委員
中濱委員、上野委員
事務局17人

4 進 行

担 当	内 容
事務局（榎原 因島瀬戸田地 域教育課長）	<p>（19:00 開会）</p> <p>1 開会 ただいまから、「第2回尾道市立小・中学校の在り方検討委員会」を開催する。本日の会は、21時頃の終了を予定している。</p> <p>2 報告事項 レジュメ縦2報告事項（1）第1回検討委員会の議事録についてである。10月9日配付資料2をご覧ください。8月8日に開催した、第1回検討委員会の議事録である。時間の関係上、後ほどご確認ください。</p> <p>次に、レジュメ縦2報告事項（2）第1回検討委員会グループ協議で出された質問への回答についてである。</p> <p>10月9日配付資料3をご覧ください。グループ協議で出された質問に対する回答となる。こちらも時間の関係上、後ほどご確認ください。</p> <p>次に、レジュメ縦2報告事項（3）実践報告である。本日は、平成29年4月に開校し、現在開校9年目となる尾道市立美木原小学校の校長に来ていただいている。これから開校後の学校の様子について実践報告していただく。10月9日配布資料4をご用意いただきたい。</p> <p>なお、配付資料には、児童が写っている写真は掲載していない。プレゼン画面で子どもの様子の紹介とさせていただきます。</p>
美木原小学校 長	<p>本日は、平成29年度に北部4小学校を学校再編して開校した美木原小学校について紹介させていただきます。</p> <p>まず、縦1 再編前の状況についてである。これは、再編前の北部4小学校の校区である。平成29年3月、旧尾道市立木頃小学校、木ノ庄</p>

西小学校、木ノ庄東小学校、原田小学校は、これまで支えていただいた地域や保護者の皆様に感謝し、それぞれに長い歴史を持つ学校を閉じた。再編前の児童数についてだが、画面は、4小学校ごとに平成25年度から再編前年度の平成28年度までの児童数をグラフで表したものである。平成28年度の木頃小学校は57人、木ノ庄西小学校は21人、木ノ庄東小学校は37人、原田小学校は36人である。4校の合計児童数は151人であった。

次に、縦2 再編後の状況についてである。平成29年4月、美木原小学校は、4小学校を再編し開校した。校区はご覧のとおり広域となり、北は御調町に、西は三原市に、東は福山市に隣接している。校区内には、高速道路（尾道道、山陽道）や国道184号、県道48号線・55号線が走っている。交通の便が良いことから、尾道流通団地、尾道工業団地に向かう車両も頻繁に行きかっている。

これは、再編後の児童数と学級数である。平成29年度147人で開校し、令和7年度は119人となっている。グラフの下に学級数を記載している。平成29年度は通常学級6学級、知的障害特別支援学級と自閉症・情緒障害特別支援学級の8学級でスタートし、令和7年度は、通常学級6学級、肢体不自由特別支援学級、病弱・身体虚弱特別支援学級と自閉症・情緒障害特別支援学級2学級の10学級となっている。

次に、開校1年目の教育活動についてである。開校当時、「花と緑と子どもの笑顔があふれる学校」をキャッチフレーズとしてスタートした。これまでの子どもたちの学びを引き継ぐとともに、美木原小学校を、こんな学校にしたい、子どもたちが安心して学ぶことができる学校に、と教職員が願いを込めたキャッチフレーズとなっている。このキャッチフレーズのもと、1年目は、子どもたちの一体感の醸成や保護者・地域から信頼される学校になるよう取組を進めた。

ここでは主な取組を6点紹介する。

1点目は、縦割り班活動である。児童がお互いの名前を覚えるきっかけとなるよう、毎日の掃除で実施を始めた。

2点目は、一体感の醸成として、ええじゃんSANS A・がりの取組である。前年度から各学校で同じ動きを練習し、再編後は2年から6年生の全員が一緒に練習して出場した。

3点目は、総合的な学習の時間で地域（4小学校区）をまわるバスツアーを実施した。3年生が旧4小学校区をバスで見てまわり、広がった美木原小学校の校区を学んだ。

4点目は、地域との連携として、12月に旧4小学校区の地域の方に来ていただき体育館でしめ縄づくりを行い、地域の人に他の小学校区の

児童のことを知ってもらう機会を持った。

5点目は、児童からキャラクターイラストを募集し、画面右側にある、かわいいねこのキャラクター「よつばちゃん」が誕生した。4校が再編したことを四つ葉のクローバーで表現し、本校のがんばり目標である「あいさつ」のたすきをかけている。

6点目は、児童が「美木原小学校の自慢は何ですか。」と聞かれた時に、答えることができるように、読書活動とN I E（新聞を教材として活用する）の取組を始めた。

これは、本校の校歌である。3番の歌詞にある「緑のかおり 大きく吸って 花咲く春も 実りの秋も 天地の恵みが この身を包む あふれる笑顔 大切に」は、開校から現在まで大切にしているキャッチフレーズ「花と緑と子どもの笑顔があふれる学校」とも重なり、歌うたびに、美木原小学校が校歌と共に歩んできているような気がしている。

次に、縦3 通学の状況についてである。校区が広くなり、児童の約半数、今年度は57人が通学バスを利用している。徒歩通学者は、通学班を6班編成し通学している。

通学バスについては、地域が広いことから4つのコースがあり、一番遠距離になるAコースは旧原田小学校区の小原バス停を起点として、12.6km、約28分の道のりである。Bコースは、旧原田小学校区の枝上バス停を起点として、Cコースは旧木ノ庄東小学校区の八幡池バス停を起点として、Dコースは旧木ノ庄西小学校区の上徳口バス停を起点として運行されている。

これは、下校時の様子である。1便、2便、一斉便と時刻が決まっており、学年によって乗る便が変わるので、画面右側のように、毎月保護者に予定表を渡している。A、B、C、Dとコースごとに4台のバスが到着し、児童は玄関で、コース別に並び、名簿で確認後、教員が先導して一列でバスのところへ行き乗車する。遠距離から通う児童にとって、バス通学は、児童の安全な通学、保護者の安心感につながっている。今後も教育委員会と連携し、児童の安全な通学を確保していく。

次に、縦4 今年度9年目を迎えた本校の様子について紹介する。今年度の美木原小学校の学校教育目標は、「ともに学び合い、未来を創る子どもの育成」として進めている。児童数は5月1日から1人増えて現在120人、学級数は10学級である。

開校当時は、キャッチフレーズであった「花と緑と子どもの笑顔があふれる学校」は現在ではスクールビジョンとして引き継いでいる。

教育研究は、学校の自慢「読書活動とN I E」との関連を図るため、国語科を中心に進めており、今年度の研究主題は「読解力を高める授業

づくり」としている。

学校の自慢の一つ、読書活動の取組である。本校は、学校まると図書館を目指しており、児童はこうした環境を「美木原ほんのもり」と呼んでいる。廊下や多目的ホールにも本を置いている。1学期には各学級でブックトークをした。現在図書室のリニューアルを進めており、11月5日には地域の方にも図書室を見に来ていただくようご案内している。

10月3日には、美木原「ほんのもり」に動物の本棚がやってきて学校の自慢がパワーアップした。この本棚は本校の技術員が作成し、現在、お薦めの本を載せている。多くの子ども達が図書室に見に来てくれた。

もう一つの学校の自慢、NIEについてである。本校には新聞閲覧コーナーがあり、毎日3社程度児童が手に取ってみることができるようにしている。また、季節ごとに新聞を変えて購読している。委員会活動では、「とくダネ！美木原コーナー」として、担当する児童が気になる新聞記事をピックアップし、その記事について、考えたことや思ったことを分かりやすくまとめて、給食時間中に放送している。放送した後の記事は、児童玄関に掲示している。週末の宿題では、NIEワークシートを行ったり、ドリルタイムにタブレットを使って中国新聞の記事を読んで、感想や内容をノートに書いたり、夏休みの新聞コンクールに参加したりと、NIEの取組を継続している。

次に、一体感の醸成を図る学校行事である。左側は、4月のお迎え遠足である。1年生を迎える会として全校で縦割り班のグループで、びんご運動公園まで歩いた。右側は、みなと祭りの「ええじゃんSANSAGARI」の踊りに、出場した「美木原スマイリーズ」である。昨年度までは5、6年生の出場だったが、来年の開校10周年を見据えて、3年生から6年生で出場した。縦割り班活動、ええじゃんの取組も継続している。

これは、委員会が活躍する「お楽しみ集会」である。委員会ごとにクイズやゲームを計画した。本のクイズや、お花の名前クイズなど、本校ならではの内容となっている。

次に、地域や保護者との連携についてだが、信頼される学校づくりや一体感の醸成を意識して取り組んでいる。地域と連携した学習活動は、各学年で行っているが、本日は3つの学年の取組について紹介する。3年生は、原田のやまそらと佐藤農園を見学し、4年生は、水生生物観察会で木頃地域の藤井川と木ノ庄東地域の木梨川の水生生物を地域の方と観察した。5年生は、流通団地入り口にある花壇に、花の苗を地域の方と植えた。

次に、育友会主催の＜よつ葉祭＞である。令和6年度から、音楽発表

会の後に育友会主催の「よつ葉祭」が復活している。今年度は10月18日に予定している。子ども達が喜ぶよう、校舎内での「美木原クイズラリー」、体育館でのミニゲーム（射的やスーパーボールすくい、ストラックアウト）、キッチンカーや食事券の引き換え（おにぎりや焼きそばなど）があり、保護者と地域の方にも楽しんでいただき、さらなる一体感の醸成を目指す。

次に、縦5 美木原小学校9年間の歩みを4点にまとめた。

1点目、開校当時、キャッチフレーズであった「花と緑と子どもの笑顔があふれる学校」を大切に継承し、今ではスクールビジョンとなって、教職員、児童、保護者、地域と共有し、一つの方向性に向かって学校教育活動を進めることができている。

2点目、再編前には、学年1人や3人、同性のみの学年等、少人数の環境だった児童が、再編により学級の人数が増え、集団としての活動ができるようになった。このことは、自分の居場所を見つけたり、活躍する場ができたりし、児童同士の良好な関係につながっていった。また、開校から縦割り班活動、ええじゃんSANS A・がりなど大きな集団としての取組も始め、学級だけでなく学校全体の一体感の醸成を図っていったことが現在の一体感につながっている。

3点目、児童が「美木原小学校の自慢は何ですか。」と聞かれた時に、答えることができるようにと、始まった読書活動とNIE（新聞を教材として活用する）の取組は、平成31年度には、子どもの読書活動優秀実践校 文部科学大臣表彰を受け、令和元年度から3年間、県NIE教育優秀奨励賞受賞することができた。これからも学校の自慢を継承し、さらなる充実を目指す。

4点目、保護者、地域から信頼される学校となるよう、児童が安全に通学でき、安心して学べる環境づくりに取り組んできた。保護者や地域の方に学校へ来て児童の様子を見ていただいたり、児童が地域に出向き学んだりすることや、先ほど述べた、開校当時から継続した取組をしていくことで、本校教育への理解が深まり協力が得られているように感じている。

最後に、児童アンケートを紹介する。平成29年度の校長だより「美木原小学校の良いところは？」というアンケートの結果があった。上から順に人数が多かった回答である。令和7年度もアンケートをしたが、開校当時の思いを感じさせるキーワードがある。児童の中に、「花と緑と子どもの笑顔があふれる学校」というキャッチフレーズは、開校当時から今につながっているのではないかと思っている。

以上、美木原小学校9年間の主な取組について実践報告させていただ

事務局（榎原 因島瀬戸田地 域教育課長）	<p>いた。これからも、花と緑と子どもの笑顔があふれる美木原小学校であり続けることができるよう、教職員一同全力で教育活動に取り組む。</p> <p>質問があればお願いします。</p> <p>（意見なし）</p>
	<p>以上で、実践報告を終わる。</p> <p>ここで美木原小学校長は退席される。ありがとうございました。</p>
藤井委員長	<p>3 議事</p> <p>次にレジュメ縦3 議事に入る。ここからは、藤井委員長に進行をお願いします。</p> <p>本日のテーマは「尾道教育の目指す学校像、子ども像」についてとなっている。まず、（１）事務局から、尾道教育や国の教育の現状や方向性について、また、本日の協議の視点等の説明をお願いします。</p>
事務局（安保 学校経営企画 課長）	<p>それでは、本日のテーマである「尾道教育の目指す学校像、子ども像」を協議するにあたり、説明する。</p> <p>はじめに、前回の検討委員会での説明と重複するところもあるが、改めて尾道教育総合推進計画について確認する。諮問事項検討資料８ページをご覧ください。</p> <p>尾道教育総合推進計画は、本市の最上位計画である「尾道市総合計画」の教育分野における計画となっている。</p> <p>（１）学校教育分野の教育政策の柱は、「夢と志を抱き、グローバル社会を生き抜く子どもの育成」である。急激に変化する時代にあっても、尾道の子どもたちが「夢と志を抱き、自分の可能性に挑戦し、豊かな人生を切り拓いてほしい」という願いを込めている。</p> <p>（２）育てたい資質・能力についてである。学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性」等、実際の社会や生活で生きて働く「知識及び技能」、未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力」等。これらの３つの力をバランスよく育み、社会に出てからも学校教育で学んだことを活かせるよう、郷土おのみちや学校への愛着や誇りを醸成し、主体性をもって、尾道のみならず世界に貢献できる人材の育成をめざしている。</p> <p>施策目標と施策は（３）のとおりである。確かな学力の育成、豊かな</p>

心の育成、健やかな体の育成、信頼される学校づくり、安全・安心で良好な学校施設の整備の5つの観点から、教育に関する施策を総合的・計画的に進め、「知・徳・体」のバランスの取れた教育活動をさらに充実させ、生きる力の育成に取り組んでいる。なお、現行の推進計画は、令和4年度から令和8年度までで、来年度が最終年度となっている。

次に、昨年度から取り組んでいる「グローバル・ローカル・尾道らしさ」について説明する。(4)冊子資料4をご覧ください。「グローバル」の部分では、義務教育終了時に、日常生活において英語でやり取りができることを目標に、イングリッシュ・デイと称して、複数のALTと英語を使った活動を行ったり、台湾との交流を促進したりするなどして、児童生徒が英語に触れる機会を増やす取組などを行っている。

(5)冊子資料5をご覧ください。「ローカル」の部分では、全ての子どもが「自分の住んでいる地域・尾道のことが好き」と答えることができるよう、ふるさと学習を充実し、尾道の教育資源と出会い、触れ合い、体験・交流することを通して、尾道への愛着や誇りを醸成するための取組や、地元企業による出前授業や職場体験学習などを通して、夢や志を抱き、尾道に貢献しようとする意欲を高めるための取組などを行っている。

これらの世界を意識したグローバルな学びと、地域を意識したローカルな学びを組み合わせ、尾道らしさのある9年間の教育内容の創造に取り組んでいるところである。

冊子資料6をご覧ください。「令和7年度さくら尾道プロジェクト」についてである。本年度は、尾道市合併20周年なので、令和7年を「さくら尾道プロジェクト」の一環として、新たな尾道教育のスタートと捉え、尾道教育の5つの価値観「情熱・行動・挑戦・貢献・継承」を意識し、尾道教育をさらに進化・発展させていきたいと考えている。

次に、近年の教育の動向等についてである。学校では、学習指導要領に則って、各教科等の教育指導を行っている。10月9日配付資料5をご覧ください。現行の学習指導要領が改訂された時の保護者向けのリーフレットである。資料は平成29年に改訂された小学校のものだが、平成30年に改訂された中学校も資料右下の教科のところ以外は同じ内容となっている。

社会の変化に応じて、目指す資質・能力も変化しており、学ぶ教科等も時代とともに変わってきている。例えば、平成29年・30年の改訂では、小学校3・4年生で外国語活動、5・6年生で外国語が導入された。また、小中学校ともに道徳が教科化されている。

資料の裏面をご覧ください。外国語教育や道徳教育の他、プログ

ラミング教育や、伝統や文化に関する教育などを重視し、充実を図っている。現在、国では次の改訂に向けて議論が進んでおり、情報教育がさらに強化されるという方向性が示されている。

それでは、ここで動画を視聴していただく。この動画は、文部科学省が作成したもので、一人一台端末を活用した学習のダイジェスト版である。子どもたちのインタビューもある。授業の様子は部分的ではあるが、一人一台端末の導入によって、学習スタイルが大きく変化していることを知っていただき、また、急激に変化していく社会の今後をイメージしながら、これからの時代を生きる子どもたちに必要な資質・能力は何か考えながら視聴していただければと思う。

～動画視聴「一人一台端末で学校が変わる！」～

いかがだったでしょうか。市内の学校でも授業のねらいや内容に応じて、一人一台端末を活用することによって、学習方法が多様になり、学びの質の向上に向けて授業に取り組んでいる。

10月9日配付資料6をご覧ください。各学校では、児童生徒一人一人に合った「個別最適な学び」と、多様な他者と協働して学習する「協働的な学び」を一体的に充実することで、子どもたちが、主体的・対話的に学び、そして深い学びにつながるよう日々、授業改善を行っているところである。

右下の現行の学習指導要領の前文にもあるように、これからの学校には一人一人の児童（生徒）が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められている。この後、「尾道教育の目指す学校像、子ども像」について協議していただく。

10月9日配付資料1 レジュメの裏面縦2 協議の視点をご覧ください。こんな学校に通わせたい、こんな学校で学ばせたいという目指す学校像は、少子高齢化やグローバル化、ICTをはじめとする様々な分野での技術革新などにより、10年前、20年前とは変化しつつあると考えられる。10年後、20年後は、さらに社会が大きく変化していくと予想される。学校が、子どもたちにとって多様な価値観や考え方を学ぶ場、多様な子どもたちや地域の人たちとのコミュニケーションや体験を通して、人格の形成（成長）ができる場として、学校での学びの果たす役割は、さらに重要になっているのではないかと考えている。

こんな子どもに育ってほしいという目指す子ども像は、10年前、2

藤井委員長	<p>0年前と変わっておらず、10年後20年後も普遍的な子ども像があるのではないか。また、普遍的な子ども像に加えて、時代の変化に応じた子ども像もあるのではないか。と考えている。</p> <p>以上、説明とさせていただきます。</p> <p>ただいまの事務局の説明について、質問があればお願いします。</p> <p>(意見なし)</p> <p>レジュメ縦3(2) グループ協議を行う。まず、グループ協議について事務局から説明をお願いします。</p>
事務局(井上庶務課長)	<p>それでは、グループ協議について説明する。10月9日配付資料1レジュメの裏面をご覧ください。</p> <p>縦1 本日のテーマは、「尾道教育の目指す学校像、子ども像」である。</p> <p>縦2 先ほど事務局から説明をした協議の視点について、まとめてあるので参考にさせていただきたい。</p> <p>次に縦3 グループ協議について説明する。</p> <p>(1) グループ協議の流れである。グループ協議は各グループの司会者が進行する。協議時間は約40分である。協議は、尾道教育が目指す学校像と子ども像はつながりのあるテーマなので、学校像と子ども像は同時に進行していく。その際、目指す子ども像を初めにイメージしていただき、その後、目指す子ども像を実現するための、目指す学校像をイメージしていただき、付箋を活用しながら協議していただければと思う。出来れば、協議の時間の後半は、目指す子ども像と学校像につけたタイトル等、全体を俯瞰して協議し、グループの意見を整理していただきたい。</p> <p>協議終了後、Aグループから協議内容の発表をしていただく。Bグループ以降は、進行の都合上、前のグループから出た意見等とは異なる意見を中心に、発表をしていただければと思う。</p> <p>(2) グループ協議の進め方については、記載している順番で司会者が進めていく。各グループの司会者の進行にご協力いただければと思う。</p> <p>説明は以上となる。</p>
藤井委員長	<p>それでは、20時20分頃まで、グループ協議をしていただきたい。</p> <p>～グループ協議～</p>

<p>藤井委員長</p>	<p>(4 グループに分かれて約40分間グループ協議)</p> <p>それでは、時間になったので各グループから出た意見等を共有したいと思う。Aグループから発表をしていただくが、進行の都合上、Bグループ以降は、前のグループで出た意見等とは異なる意見を中心に発表をお願いします。</p> <p>発表の後の全体協議では、グループ協議で出された意見から、より深めていきたい視点や、意見として出されなかった視点でも、諮問事項の検討として必要だと思う視点について、深めていきたいと思う。</p> <p>それでは、Aグループお願いします。</p>
<p>A委員</p>	<p>目指す子ども像、それから目指す学校像ということで、どういう意見が出たか読み上げていく。</p> <p>目指す子ども像、まず学力、好奇心、グローバル人材の育成、外国語の勉強、年齢層関係なく。</p> <p>目指す子ども像、自分の得意分野を持つこと、将来の目標の設定、なりたい人間像、やりたい仕事の分野、資格勉強、技能技術の習得。</p> <p>目指す子ども像、多様性を認め合い尊重し合う、将来にわたってウェルビーイング、地元故郷を大切にする人材の育成、将来地元に戻ってくるにはどうしたらいいのか、尾道らしさ、そのために地元理解。そういう言葉が出た。</p> <p>次に目指す学校像。教育内容、学力自立、外国語教育、専門知識の習得を目指すには、特化した教育の在り方とは。</p> <p>目指す学校像、信頼される学校、社会教育との連携、地域と共にある学校、ふるさと教育。</p> <p>目指す学校像、ハード面、安全、子ども、学校施設、通学路を含めて、すべて安全に子どもが安心して教育を受けられる施設を造る。施設更新、バリアフリー、住民も、最近は防災拠点として、学校が避難場所等に挙げられているため、地域の高齢者の方も使えるような施設を、バリアフリーを考えてそういう防災拠点として作るべき。以上である。</p>
<p>藤井委員長</p>	<p>次に、Bグループお願いします。</p>
<p>B委員</p>	<p>まず一番右の上に多様な学びというグループがあるが、目指す子ども像で、多様な学びができるような子どもがいいなというのと、それから自己有用感、自分が大切にされているという実感、自分でできたという経験だとか、協調性があるような子どもを育てたい。それらを多様な学</p>

	<p>びも含めて支えるのは基礎学力、学力が定着するというのが土台なのかなという議論になった。</p> <p>また、しなやかに何回でも失敗しても挑戦するたくましい子どもという意味で主体性や挑戦する子どもを包括するような意味でレジリエンスという言葉も出てきた。</p> <p>そして、それらを実現するための目指す学校像としては、一番大きなオープンな、というところで議論が広がったが、これは施設の意味合いでオープンな、というところもあるが、地域とのつながり、自然とのつながり、色々な人とのつながり、尾道で育てるという意味でオープンという言葉でくくられた。</p> <p>少し矛盾するかもしれないが、一方で、安心で安全な施設というところも大切である。ここの両立は難しいところもあるが、多くの人の目が学校に向かうことで、地域の人の目が入ることで、オープンであり、かつ安心安全な施設が実現するのではないかという意見が出た。</p> <p>また、深い学びというところで、先程の学びのところから繋がっているが、子どもたちが単純に楽しく学びながら、そうしていくなかで基礎的な学力も育っていき、自分の知的好奇心を探究していくような、そして課題を発見して自分で解決できるような学びができたらいいなと、そういう施設をイメージしながら議論が進んだ。</p> <p>後は、思いやりのある子に育ってほしい。そしてそのためにはきめ細やかな子どものサポートも必要だという意見が出た。以上である。</p>
藤井委員長	次に、Cグループお願いします。
C委員	<p>目指す子ども像を中心に話をした。目指す生徒像のところで、まず友達であったり、自他を大切にするという関係の中のところからスタートし、友達と共に協力し合い、互いの自主性を大切にするという、協働とコミュニケーション的なことを教わっていったり、そのために学びを大切にする姿勢という意見、様々な体験や経験を大切にすることが必要である。そのことが自己実現に繋がっていくというところを。最終的にこの育ちというところに繋がっていきたいという話をした。</p> <p>そのことを学校としてやっていくためには何が必要かということで、つながったかたち。まずはベースとして安全安心というところ、決めつけたというよりは、学びの余白があるような空間となるかというところを基準として、目指す子どもを育てていくためには文化であったり地域の中での体験であったり、自信であったり、自分の学校での自慢であったり、育ちのロケーションとか今ある場所へのそういった必然性である</p>

	<p>とかいったことを考える。</p> <p>加えて、心というのをどう育てていくかということ、場の意識であったり、成長させていくために一人一人の生徒を大切にしたり、子を大切にしたり、協働を含めたところの成長の場としての意味合い。加えて、意見として、我々はこの経験って大人としてやっているけれど、現に子どもが考えるとしたらどういうことを考えるかなと思い、今をリアルに生きている子どもたちがこういったことを考えてそれを反映させていくのが大事なことじゃないかなと思う。</p>
藤井委員長	<p>最期に、Dグループお願いします。</p>
D委員	<p>目指す子ども像、目指す学校像ということで、まず、大きく分けて4点で考えた。心の部分、学力の部分、教育環境の部分、地域との関わりというところで大きく4つに分けた。</p> <p>皆さんと違い、追加であると思った点は、目指す子ども像とはなんだといった際に、我々は目指す大人の像といったものがとても大事なのではないかと、子ども像というからには大人も目指すものがあって共通しているのではないかと考えた。</p> <p>最初に出たのは心の部分であった。多様性の尊重であったり、共感をする心、寛容な心であったり、自分を大切にしていられる心、他者を重んじる心、幸せを願える心がとても大事なのではないかという意見が出た。相手を大切にする心ということである。それに伴い、人とのつながりであったり、そういうところを大切にできる学校であればいいと思った。</p> <p>学力のところは、自分の考えを表現できる、すごく大事なので「ことば」というところに丸をしているが、ことばを大切にできるというところがあれば、学力もいずれ伸びていくのではないかと考えた。ことばを大切にすることで、担当の国語や英語、色々な授業があるが先生たちも授業づくりのところでしっかり、頑張れる学校、大切にできる学校で、ここに書いてあるが、授業で勝負できる学校、素敵な先生が育つ学校というところが大切ではないかと思った。</p> <p>教育環境というところでは、今ICT社会なので、いろいろなものを使いながら、情報を活用できる子どもに育ててほしいという意見が出た。ICTに強い環境整備や、指導ができる先生方がいればいいと思った。</p> <p>最後に出ていたのが地域とのつながりということで、郷土を愛する、誇りを持てる子どもたちを育てていく、地域とも連携して地域で子どもを育てる、つまり子どもたちが自慢できる学校、地域の人たちが自慢で</p>

<p>藤井委員長</p>	<p>きる学校になっていくことこそ目指すべき学校像ではないかという意見が出た。</p> <p>それでは、レジュメ縦3（3）全体協議に入る。</p> <p>まず、簡単にまとめさせていただく。</p> <p>どこのグループも地域郷土を大切にした教育の中で、地域との連携を図っていくということが共通であった。それから安全面で、恐らく物理的な環境を、施設面、安全をどのグループもイメージされていた。ここがハード的に挙がっていたのだと思う。心の成長を期待するというのが挙がってきていたが、その関係で学びを充実させていく必要があるということが共通していた。このあたり、自分で自習するだけではできない、他に子どもたちがいないとできない学びを学校では求められているということが第一の印象として思った。</p> <p>新しい方向性、これについて言及があったと思う。冒頭で文部科学省の動画にあったが、ICT活用整備だとか、非常に印象に残った言葉としてCグループの「余白のある学び、空間」というのがあった。今、尾道にある学校は恐らく、団塊ジュニア世代が学校に入っところをイメージして作られていると思うが、そこを新しいものにしていけたらよいのではという思いがこの言葉の中にあるのではないかと推測した。</p> <p>このようなことを思ったが、皆様から出た意見については、他のグループに触発されて何か思ったということもあると思う。少々時間がまだあるので、もう少し議論を深めていけたらと思う。まずは、特に私からこのことについてというようには指定せずに、意見をいただきたいと思うが、委員の皆様から言っておきたいというような意見があればお聞きたい。</p> <p>（意見なし）</p> <p>では、私の方から少し申し上げる。いろいろな学びの姿、学校生活の姿があってほしいという意見をいただいたと思うが、それを実現するためには、教職員のソフト面のこともあると思うし、施設設備等のハード面もあると思うが、こういう方向で学校の整備や充実を図ってほしいというような意見があればいただきたいと思うがいかがだろうか。</p> <p>（意見なし）</p> <p>では、本安副委員長にまとめていただきたいと思う。</p>
--------------	--

本安副委員長	<p>私もいろいろなグループの意見を聞かせていただいて、新しい学校の在り方とはどのようなものなのかなと思いながら聞かせていただいた。一つ、多様な学びということがあったので、多様な学びのできる学校とはどのようなかなと思った時に、やはり先ほど出た、団塊の世代が出たような区切られた学校だけではなくて、オープンスペースであるとか、協議ができるような、レイアウトができるような教室、大きさも自由であったり、I C T機器がすぐに使えるような、そんな学校であったりすることが望ましいのかなと思いながら聞かせていただいた。私の方からは以上である。</p>
藤井委員長	<p>もう少し、時間があるので願います。Dグループの方から何か発言があるだろうか。</p>
D 委員	<p>子どもたちにとって、学校は学校教育を学ぶ場だとは思いますが、やはり僕達は保護者として今日来ているので、家庭教育と学校教育というのを、しっかり連携できるような関係性を作り上げられたらいいと思う。今はどっちの教育を学ぶべき場所なのか、という線引きをする必要はないかもしれないが、少し曖昧すぎる部分が多く、保護者として学校に頼りすぎていることが多い部分があるなと思ったり、逆に先生が保護者に頼りすぎている部分もあるかもしれない。家庭教育というところはしっかりやっていきたいというのは、目指す学校像の手伝いもできるかと聞いていて思った。ここがすごく大事な部分ではないかと思う。</p>
藤井委員長	<p>ありがとうございます。他のグループからも意見を聞けたらと思うがいかがだろうか。</p> <p>(意見なし)</p> <p>ではBグループの方で何か言い足りないことがあると思うがいかがだろうか。</p>
E 委員	<p>色々なグループの意見を聞かせてもらい、こういう考えもあるんだ、ああいう考えもあるんだ、と私もすごく視野が広がったと思った。普遍的な子どもの在り方と、変わっていく子どもの在り方があって、という話だったが、変わっていく子どもの在り方を、私たち大人がどう見るかというのがすごく大切になってくると思う。学校というのは絶対評価で</p>

<p>藤井委員長</p>	<p>ある。その絶対評価に満たない子たちというのを、私たち大人がどうやって見ていくのか、何を良しとしているのかという、そういう視点を広げていくことも、子どもの在り方を考える上で大切なのかと思いながら聞いていた。</p> <p>ありがとうございます。もう一人ぐらい伺いできたらと思うがどうか。</p> <p>(意見なし)</p> <p>今意見をいただいて思ったことだが、大人がしっかりしないといけないというところがどのグループにも観点としてあったと思う。子どものための施設で子どものための学校ではあるが、大人の方のこともしっかり考えて、大人が学ぶということも含めて、これからの学校は考えていく必要があると思った。ご意見ありがとうございました。全体の協議をこれで終わらせていただきたいと思う。</p> <p>最後に何か言っておきたいことがあるだろうか。</p> <p>(意見なし)</p> <p>では、進行を事務局に戻す。スムーズな進行にご協力いただき、ありがとうございました。</p>
<p>事務局（榎原因島瀬戸田地域教育課長）</p>	<p>最後に、レジュメ縦4 その他について確認する。</p> <p>次回の検討委員会の開催日だが、(1)に記載しているとおり、第3回検討委員会を、12月19日(金)19時から開催する。場所は、尾道市役所2階多目的スペース1、2である。</p> <p>次に、第3回検討委員会のテーマは、(2)にあるように「尾道教育の目指す学校像、子ども像の実現に向けた ①学校の形態について、②適正な学校の配置や規模について」である。本日持参していただいている資料、尾道市立小・中学校の在り方検討委員会諮問事項検討資料と冊子資料については、次回の会議でも使用するので必ずご持参いただきたい。本日の議事録は、次回の検討委員会にて配付する。</p> <p>以上で、閉会する。</p>